Japanese Journal of Applied Psychology
2013 Vol. 38, No. 3, 231–238

資　料

日本語版怒り反すう尺度作成の試み

八田武俊*・大渕憲一**・八田純子***

Development of Japanese Version of Anger Rumination Scale

Taketoshi HATTA*, Ken-ichi OHBUCHI** and Junko HATTA***

The purpose of this study was to develop the Japanese version of Anger Rumination Scale (ARS) by Sukhodolsky, Golub, & Cromwell (2001). Both reliability and convergent validity of Japanese ARS were examined using 265 participants. Exploratory factor analysis yielded three factors: "Anger reflection", "Thoughts of revenge", and "Memories of anger experience". The test-retest reliability coefficients over .70 and the Cronbach's alpha coefficients over almost .80 were obtained for total and each factor. These showed enough reliability and sufficient internal consistency for the Japanese ARS. The each factor of Japanese ARS was adequately correlated with Negative Rumination Scale. Each factor of Japanese ARS was positively correlated with the Anger-in and Anger-out subscales of Japanese version of Anger Expression Scale (AX), and the "Thoughts of revenge" and "Memories of past anger experience" factors of Japanese ARS were negatively correlated with the Anger-control subscale of AX. These findings in this study provided supports for reliability and convergent validity of Japanese ARS.

key words: Japanese version of anger rumination scale, reliability, convergent validity

目　　的

怒りは多くの人が日常的に体験する感情であり，約8割の人が1週間に1回以上経験している（大渕・小倉，1984）。怒りによる攻撃行動は対人葛藤を激化させたり（大渕，1993），怒りを明らかに表出するほど他者に否定的な印象を与えたりすることから（木野，2000），対人関係に悪影響を及ぼしやすい。また，怒りは心臓疾患のリスク因子となる可能性が指摘されている（鈴木・春木，1994）。怒り喚起を検討した研究は，怒り喚起の認知的要因として，被った被害の不当さや加害者の意図などがあることを示している（Averill, 1983; 大渕・小倉，1984）。

一方で，喚起された怒りが認知的再評価の仕方によって鎮静化したり，反対に持続したりすることを示した研究もある（日比野，2008）。怒りの喚起とともに，その持続や昂進も人々の生活に影響を与え

[1] 本研究は，科学研究費補助金（若手研究（スタートアップ））（研究課題番号 19830084）の補助を受け，一部は日本心理学会第75回大会にて発表された。
[2] 本研究を実施するにあたって，ご協力いただいた Denis Sukhodolsky 先生（現 Yale University）と宅香菜子先生（現 Oakland University）に心より感謝いたします。
* 岐阜医療科学大学保健科学部臨床検査学科
Department of Medical Technology, Gifu University of Medical Science, 795-1 Nagamine Ichihiraga Seki-shi, Gifu 501-3892, Japan
e-mail: hatta@u-gifu-ms.ac.jp
** 東北大学大学院文学研究科
Department of Psychology, Tohoku University, 27-1 Kawauchi Aobaku Sendai-shi, Miyagi 980-8576, Japan
*** 愛知学院大学心身科学部心理学科
Department of psychology, Faculty of Psychological and Physical Science, Aichi Gakuin University, 12 Araike, Iwasaki-cho, Nisshin-shi, Aichi 470-0195, Japan

るが，Sukhodolsky, Golub, & Cromwell (2001) は，怒り尺度の開発において，この問題が軽視されてきたことを指摘している。怒りの持続は，怒りが再喚起される頻度を高め，虚血性心疾患のリスク因子となるとの観点から，渡辺・児玉 (2001) は怒りの喚起・持続尺度を作成した。ただし，この尺度は怒りを持続しやすい個人傾向を測定するもので，怒りを持続させる要因に関する測定を含んでいない。

近年，怒りなどの不快情動を昂進させたり，持続させたりする認知的要因として反すうが注目されている。Rusting & Nolen-Hoeksema (1998) は実験場面において怒り情動を喚起させたのち，それと関連する思考に注意を向けさせる反すう条件とそれについて考えないようにする妨害思考条件を設けて，参加者のその後の情動状態を比較し，反すう条件の参加者が妨害思考条件の参加者よりも強い怒りを体験することを示している。また，Bushman (2002) は想起法によって怒り情動を喚起させたのち，参加者が怒りの原因となった相手を思い浮かべながらパンチングバッグを殴る反すう条件と，単純な運動としてパンチングバッグを殴る注意転換条件，何もせずに座って過ごす統制条件を比較した結果，反すう条件における参加者は他の条件の参加者よりも強い怒りを感じ，とくに統制条件の参加者よりも強い攻撃行動を示した。怒り体験はときに言語的なものを中心とした攻撃行動を促したり，半数近くの場合において相手から敵意や反発など好ましくない反応や結果を招いたりすることが示されている（大渕・小倉，1984）。

Martin & Tesser (1996) は，反すうを共通した道具的テーマやそれにかかわる内容についての意識的思考で，それは直結した環境手がかりがなくても再帰的に生じると定義しており，反すう思考には将来や過去に対する非現実的な想像なども含まれると述べている。ここで，道具的とは現実と未達成な目的との乖離を減少させることを意味する。さらに，Klinger (1996) は反すうが情動反応と同時に，またはそれによって生じることを指摘している。そこで，Sukhodolsky et al. (2001) は，怒り反すうを「怒りというネガティブな体験に関する非意図的で再帰的な思考に努める傾向 (p. 692–693)」と定義し，その個人的傾向を測定するため，怒り反すう尺度 (Anger Rumination Scale) を開発している。Sukhodolsky et al. (2001) は，怒り反すうという心的現象が，怒り体験への注意，過去の怒り体験の想起，怒り体験に関する反実仮想思考の 3 要素から構成されると仮定しており，怒り反すう尺度はこれらの測定を目指すものである。反実仮想思考とは，実際の怒り体験の原因と結果について考えるだけでなく，原因の代替的解釈や結果の代替的可能性に関する思考も含む。それゆえ，怒り反すう尺度の項目には，実際には行っていないが，怒りの対象に報復する空想なども含まれている。

怒り反すう尺度の作成に関して Sukhodolsky et al. (2001) は，当初の 30 項目のうち内容が一義的でない 5 項目を除いた 25 項目について行った分析結果を報告している。探索的因子分析において複数の因子に高い負荷を示した 6 項目を除く 19 項目を怒り反すう尺度とし，怒り再考因子（“腹立たしい経験をすると，あとからそのことを繰り返し思い起こす”など），報復思考因子（“争い事が終わった後でも，長い間，相手に仕返しすることを空想しつづける”など），怒り記憶因子（“不公平な扱いを受けると，いつまでもあれこれ考え続ける”など），原因究明因子（“人から嫌な扱いを受けると，どうしてそうなったのか，あれこれ理由を考える”など）の 4 因子からなることを示している。これは理論的に仮定した 3 因子構造と異なるが，Sukhodolsky et al. (2001) は内容的にはほぼ一致するとみなしている。即ち，再考因子は怒り体験への注意を，怒り記憶因子は過去の怒り体験の想起を反映し，原因究明と報復思考因子は反実仮想思考を表すと解釈している。また，3 因子構造と 4 因子構造の確証的因子分析を行い，両モデルの χ^2 値の差分を検討した結果，4 因子構造の適合度が高いことを示している。

本研究の目的は，怒り反すう尺度の日本語版を作成し，再検査法による信頼性と妥当性を検討することである。Sukhodolsky et al. (2001) は，怒り反すう尺度の信頼性を検討するため 1 カ月の間隔をおいて同じ対象者にこれを実施し，0.77 の再検査信頼性係数を得ており，本研究においても同様の手法で信頼性について検討する。

Sukhodolsky et al. (2001) は怒り反すう尺度の妥当性を検討するために，Spielberger, Johnson, Russell, Crane, Jacobs, & Worden (1985) が作成した怒り表出尺度 (Anger Expression Scale) との関連を示してい

る。これは怒り体験後の反応パターンに注目し，怒りを自己の内部に押し留め，怒りの表出を抑えようとする怒り抑制，他人や物に対して怒りを向ける怒り表出，怒りを鎮めようと努める怒り制御を測定するものである。これらのうち，抑制された怒りは反すうの材料となりやすいことから，Sukhodolsky et al. (2001) は怒り反すう尺度が怒り抑制と正の相関関係にあると予測し，この予測と一致する結果を得ている。同時に，怒り反すう尺度は怒り表出と正の相関関係，怒り制御と負の相関関係にあることも示されたが，その理論的な根拠は具体的に示されていない。本研究では，怒り反すうが怒り表出尺度の下位尺度である怒り抑制，怒り表出，怒り制御と密接に関係すると予測し，検討する。

Sukhodolsky et al. (2001) は怒り抑制以外の怒り表出尺度の下位尺度との関連性を問題にしていないが，本研究では怒り反すうが怒り表出尺度における怒り表出や怒り制御との間にも理論的な関連があると考える。Barber, Maltby, & Macaskill (2005) は怒り反すう尺度における報復思考が他者に対する許しと負の関係にあることを示しており，葛藤から時間が経ったのちも報復に関する空想を抱き続ける人は，他者を許すことが困難であろうと考察している。さらに，Bushman (2002) は反すうが怒りを増幅させ，相手に非がある状況において攻撃行動を促すことを示している。これらの結果から，怒り反すうを行うことは怒り体験に関する思考だけでなく，相手への仕返しに関する空想や，その出来事に関する暴力的な報復を思い描かせると考えられる。そこで，本研究では，怒り反すう傾向が強い人ほど，怒り表出尺度の怒り表出得点が高いであろうと予測する。

怒り反すう傾向が怒り抑制と怒り表出の両方と正の関係にあると予想することは矛盾するように見えるかもしれないが，怒り表出尺度を開発した Spielberger et al. (1985) は，怒りの表出と怒りの抑制にはほとんど相関がなく，概念的にも独立であると主張している。怒り反すう傾向が高い人は，何らかの理由で怒りを抑えようと努力するが，怒りを内的に解消することはできず，結果として反すうによって怒りが増幅され，怒り表出リスクが高くなると考えられる。それゆえ，怒り反すう傾向が強いほど怒りを鎮めようと努める怒り制御得点が低いと予想する。

さらに，本研究では怒り表出尺度の下位尺度との関連性とは別の観点からも怒り反すう尺度の収束的妥当性の検証を試みる。反すうはポジティブな事象よりもネガティブな事象について生じやすい (Gohm, Isbell, & Wyer, 1996)。怒り反すう傾向と悲しみ反すう傾向の関連について調べた Peled & Moretti (2010) は，これらが正の相関関係にあることを示している。この結果は，怒り体験について反すうしやすい人が悲しみなどの他のネガティブ情動についても反すうしやすいことを示唆している。こうした知見に基づいて，怒り体験を反すうしやすい人は，ネガティブな体験全般について反すうしやすいと考える。

反すうとは，非意図的な再帰的思考である。それゆえ，怒り反すうは，自らが望んでいない怒り体験の思考を促すものである。それは，怒り体験について考えないように努めても考えてしまう心的現象であり，言い換えると，再帰的思考のコントロールが困難な状態である。この特徴は怒り反すうだけでなく，ネガティブ体験の反すう全般に見られるものである。そこで，本研究では，怒り反すう傾向とネガティブ体験反すう傾向との間には正の関係があると予測する。

本研究ではネガティブな体験に関する反すうとそのコントロール性を測定するために，伊藤・上里 (2001) が作成したネガティブな事柄に関する反すう傾向を測定するネガティブな反すう尺度を用いる。この尺度は“何日もの間，嫌なことを考えるのに没頭することがある”などネガティブな出来事に関する反すう傾向を測定するネガティブな反すう傾向と，“嫌なことを考えていても，それに没頭せず何らかの行動をとることができる（逆転項目）”といった再帰的思考のコントロールについて測定するコントロール不可能性からなり，ネガティブな反すう尺度得点が高いほど怒り反すう尺度やその下位尺度得点も高いだろう。

方　　法

調査対象者と手続き

対象者は東海地方にある 4 年制の私立大学の学生で，講義時間中に参加を依頼した。研究目的に関する説明を行い，参加に同意した学生だけが質問紙に回答した。本研究では，再検査法による信頼性を測定するため，同じ対象者について 1 回目の測定を実

施した4週間後に，2回目の測定を実施した。2回とも回答が得られた297名（男性134名，女性158名，不明5名）のうち怒り反すう尺度について回答漏れがなかった265名（男性118名，女性147名）を分析の対象とした。有効回答率は89.2%であった。1回目の測定では日本語版怒り反すう尺度と怒り表出尺度日本語版，日本語版Buss-Perry攻撃性質問紙（安藤・曽我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井，1999）を実施し，2回目の測定ではこれにネガティブな反すう尺度を追加した。また，1回目と2回目の測定では順序効果を考慮して日本語版怒り反すう尺度の項目順を逆にした。Buss-Perry尺度は今回の目的とは無関係なので，分析には使用しなかった。また，日本語版怒り反すう尺度と怒り表出尺度の関連性は回答漏れが少なかった2回目の分について報告する。

質問紙

日本語版怒り反すう尺度　怒り反すう尺度の日本語版を作成するにあたって，原筆者の承諾を得たうえで，Sukhodolsky et al. (2001)の研究において示された19項目からなる怒り反すう尺度を日本語に翻訳した後，バイリンガルによるバックトランスレーションを実施した。その後，原筆者から指摘を受けた2項目については原文の意図について話し合い，それを正しく反映するよう改変し，これを日本語版怒り反すう尺度と仮定した。その結果，日本語版怒り反すう尺度は怒り再考（“腹立たしい経験をすると，あとからそのことを繰り返し思い起こす”など），報復思考（“争い事が終わった後でも，長い間，相手に仕返しすることを空想しつづける”），怒り記憶（“不公平な扱いを受けると，いつまでもあれこれ考え続ける”），原因究明（“人から嫌な扱いを受けると，どうしてそうなったのか，あれこれ理由を考える”）の4下位尺度で構成されるとした。本研究では，Sukhodolsky et al. (2001)と同様に日本語版怒り反すう尺度は，怒り再考が6項目，報復思考が4項目，怒り記憶が5項目，原因究明が4項目の全19項目からなるとし，回答者は各項目に関して“ほとんどない”“時々ある”“しばしばある”“ほとんどいつも”の4件法で回答する。

怒り表出尺度　鈴木・春木(1994)はState-Trait Anger Expression Scaleの日本語版を作成しており，それに含まれる怒り表出尺度日本語版は怒りの表出に関する個人傾向を測定する尺度である。この尺度は全24項目からなり，回答者はこれらの項目について“全く当てはまらない”から“とてもよくあてはまる”の4件法で回答する。鈴木・春木(1994)の研究結果は，怒り表出尺度日本語版が怒りの表出（“ひとと言い合ったりする”など）に関する7項目，怒りの抑制（“誰にも知られないように，自分の胸の中だけで他人を非難する”）に関する6項目，怒りの制御（“気を静めてかんしゃくを起こしたりしないようにする”など）に関する7項目からなることを示している。

ネガティブな反すう尺度　ネガティブな反すう尺度は反すうの原因を特定せず，ネガティブな対象全般について反すうする個人傾向を測定する尺度で（伊藤・上里，2001），ネガティブな反すう傾向（“何日もの間，嫌なことを考えるのに没頭することがある”など）と，そのコントロール不可能性（“嫌なことを考えていても，それに没頭せず何らかの行動をとることができる”など）の二つの下位尺度から構成される。ネガティブな反すう傾向とは，ネガティブなことに関する反すうしやすさで，逆転項目を1項目含む7項目からなる。ネガティブな反すうのコントロール不可能性とは，ネガティブな反すうをコントロールできないと感じる傾向を指し，すべて逆転項目である4項目からなる。ネガティブな反すう尺度は11項目とダミーの3項目，加えて“よく考える嫌なこと”に関する自由記述からなり，回答者は自由記述以外の項目について，“当てはまらない”から“あてはまる”の6件法で回答する。

結　　果

因子構造

日本語版怒り反すう尺度の構造について検討するため，1回目のデータについて探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行ったところ，Table 1に示したように3因子が抽出された。因子負荷量の大きい項目を見ていくと，第1因子は怒り体験の理由や原因について注意を向け，繰り返し考えることを表す項目からなるため怒り熟考因子とし，第2因子は過去の怒り体験や記憶の想起に関する項目からなるため，怒り体験想起因子とした。第3因子は怒り情動が向けられた相手に対する報復について想像したり考えたりすることを表す項目からなるため，

Table 1　日本語版怒り反すう尺度の因子パタン行列

	項　目	I	II	III
因子 I：怒り熟考 (α=.89)				
12 (12)	人から嫌な扱いを受けると，どうしてそうなったのか，あれこれ理由を考える。	**.89**	−.31	.08
16 (17)	腹の立つことがあると，なぜこんなことになったのか，いつまでも考え続ける。	**.79**	.030	−.02
11 (11)	腹の立つ出来事があると，それについて分析をする。	**.77**	−.09	−.03
17 (18)	嫌なことがあると，些細なことであっても，しばらくの間，気になって仕方がない。	**.73**	.09	−.08
18 (19)	何かのせいで腹が立ったときは，そのことについて，あれこれ何度も繰り返し考える。	**.69**	.27	−.09
9 (9)	腹の立つ経験をすると，しばらくの間そのことについて考え続ける。	**.53**	.26	.02
10 (10)	人と対立すると，それにとらわれてしまい，ほかのことが考えられなくなるといったことが何度もあった。	**.50**	.06	.25
因子 II：怒り体験想起 (α=.84)				
5 (5)	ずっと昔のことなのに，思い出すたびに腹の立つ出来事がある。	−.21	**.88**	.05
14 (15)	人生の中で経験したいくつかの出来事については，今でも怒りを感じる。	−.13	**.75**	.03
1 (1)	過去の腹立たしい体験を繰り返し思い出す。	−.01	**.71**	−.03
19 (24)	腹立たしい経験をすると，あとからそのことを繰り返し思い起こす。	.24	**.66**	−.07
3 (3)	腹立たしい出来事があると，そのことを長い間考え続ける。	.22	**.46**	.14
8 (8)	眠りにつく前には，腹立たしい記憶がよみがえってくる。	.20	**.42**	−.08
2 (2)	不公平な扱いを受けると，いつまでもあれこれ考え続ける。	.22	**.28**	.22
因子 III：報復思考 (α=.78)				
15 (16)	人から嫌なことをされると，どうやって仕返ししようか，そのことばかり考えて，頭から離れない。	−.04	−.05	**.80**
13 (13)	腹の立つことがあると，それについて暴力的な内容の空想にふけることがある。	.06	−.12	**.75**
4 (4)	争い事が終わった後でも，長い間，相手に仕返しすることを空想しつづける。	−.13	.17	**.74**
6 (6)	私を傷つけた人は許せない。	.06	.05	**.50**
7 (7)	口論をした後は，頭の中で相手と言い争いを続ける。	.27	.12	**.32**

因子間相関

	I	II	III
I	1.00	.69	.56
II		1.00	.64
III			1.00

注．( ) 内の数字は，Sukhodolsky et al. (2001) の研究における項目番号を表す。

報復思考因子とした。本研究において，項目 2 と 7 はすべての因子に対して .40 を超える負荷を示していなかった。これら以外の項目は特定の因子に対してのみ .40 以上の負荷を示していたことより，日本語版怒り反すう尺度は項目 2 と 7 を除く 17 項目からなり，その合計得点の平均値は 31.60，標準偏差が 9.48，最大値と最小値は 64 と 17 であった。さらに，日本語版怒り反すう尺度は 3 因子構造であると解釈でき，怒り熟考因子における平均値は 14.76，標準偏差が 5.06，最大値と最小値は 28 と 7 であった。怒り体験想起因子における平均値は 10.47，標準偏差が 3.47，最大値と最小値は 23 と 6 で，報復思考因子における平均値は 6.37，標準偏差が 2.53，最大値と最小値は 16 と 4 であった。

信頼性

因子分析の結果から項目 2 と 7 を除く 17 項目の合計得点を日本語版怒り反すう尺度の得点とし，再検査法による信頼性を検討するため，2 回測定した

日本語版怒り反すう尺度の得点について相関分析を行ったところ，強い正の相関関係が示された (r=.76)。同様に，日本語版怒り反すう尺度の因子ごとに相関分析を行ったところ，Table 1 に示した 7 項目からなる怒り熟考因子では r=.70，項目 2 を除く 6 項目からなる怒り体験想起因子では r=.71，項目 7 を除いた 4 項目からなる報復思考因子では r=.76 であったことから，すべての因子において 2 回の得点間に強い正の相関関係が示された。内的整合性について調べるため，1 回目の日本語版怒り反すう尺度の 17 項目について Cronbach の α 係数を求めたところ，α=.92 であった。また，各因子の項目間の α 係数は .78 以上であった (Table 1)。

収束的妥当性

本研究では，2 回目に測定した日本語版怒り反すう尺度の総得点，各因子の合計得点と怒り表出尺度日本語版における怒り抑制，怒り制御，怒り表出の得点について相関分析を行った (Table 2)。分析では，怒り表出尺度日本語版について回答漏れがあった 9 名を除く 256 名を対象とした。日本語版怒り反すう尺度の総得点は怒り表出 (r=.37, p<.01)，怒り抑制 (r=.30, p<.01) と正の相関関係にあり，怒り制御 (r=−.17, p<.01) と負の相関関係にあることが示された (Table 2)。日本語版怒り反すう尺度における怒り熟考因子の得点は，怒り表出 (r=.28, p<.01) や怒り抑制 (r=.33, p<.01) と有意な正の相関関係にあることが示された。一方，怒り制御との間に有意な相関関係は示されなかった。つぎに，報復思考因子の得点は，怒り表出 (r=.37, p<.01) や怒り抑制 (r=.13, p<.05) と正の相関関係にあるが，怒り制御と負の相関関係にあることが示された (r=−.26, p<.01)。怒り体験想起因子の得点は怒り表出 (r=.35, p<.01) や怒り抑制 (r=.25, p<.01) と正の相関関係にあり，怒り制御と負の相関関係にあることが示された (r=−.19, p<.01)。

2 回目に測定した日本語版怒り反すう尺度の得点とネガティブな反すう尺度の得点について相関分析を行った。この分析ではネガティブな反すう尺度について回答漏れがあった 5 名を除く 260 名を対象とした。その結果，両得点は有意な正の相関関係にあった (r=.59, p<.01)。さらに，日本語版怒り反すう尺度における因子ごとの合計得点とネガティブな反すう尺度の得点について相関分析を行った結果，ネガティブな反すう尺度の得点は日本語版怒り反すう尺度における怒り熟考 (r=.61, p<.01)，報復思考 (r=.30, p<.01)，怒り体験想起 (r=.54, p<.01) の得点と有意な正の相関関係にあった。

考　　察

本研究の目的は，怒りの反すう傾向を測定する日本語版怒り反すう尺度を作成することであった。日本語版怒り反すう尺度の信頼性について，再検査法による信頼性係数は .76 であった。この結果は日本語版怒り反すう尺度が信頼性の高い尺度であることを示している。また，日本語版怒り反すう尺度の各因子における項目間の α 係数は .78 以上の高い値を示しており，日本語版怒り反すう尺度は内的整合性を満たすといえる。

本研究の結果は，日本語版怒り反すう尺度が怒り熟考因子（7 項目），報復思考因子（4 項目），怒り体験想起因子（6 項目）の 3 因子構造であり，全 17 項目からなることを示唆している。怒り熟考因子は，Sukhodolsky et al. (2001) の研究における“人から嫌な扱いを受けると，どうしてそうなったのか，

Table 2　日本語版怒り反すう尺度の総得点と下位尺度，ネガティブな反すう尺度，怒り表出尺度日本語版の下位尺度の得点に関するピアソンの積率相関係数と基本統計量

	平均値 (*SD*)	最小値	最大値	1	2	3	4	5	6	7
1. 日本語版怒り反すう尺度 (α=.93)	33.04(9.97)	17	63							
2. 怒り熟考 (α=.90)	15.75(5.07)	7	28	.92**						
3. 報復思考 (α=.77)	6.28(2.47)	4	16	.73**	.51**					
4. 怒り体験想起 (α=.86)	11.01(3.83)	6	22	.91**	.76**	.58**				
5. ネガティブな反すう尺度 (α=.80)	36.64(8.75)	11	64	.59**	.61**	.30**	.54**			
6. 怒り表出 (α=.78)	19.73(4.16)	9	33	.37**	.28**	.37**	.35**	.31**		
7. 怒り抑制 (α=.64)	20.90(3.33)	11	30	.30**	.33**	.13*	.25**	.30**	.07	
8. 怒り制御 (α=.82)	18.51(3.49)	10	28	−.17**	−.07	−.26**	−.19**	−.14*	−.44**	.42**

**p<.01, *p<.05

あれこれ理由を考える”といった原因究明因子の全4項目と怒り再考因子における“嫌なことがあると，些細なことであっても，しばらくの間，気になって仕方がない”などの3項目からなり，怒り体験に注意が向けられやすく，分析または省察し続けることを反映した概念である。本研究における報復思考因子は，Sukhodolsky et al. (2001) の研究における報復思考因子を構成する項目とほぼ同様であり，“人から嫌なことをされると，どうやって仕返ししようか，そのことばかり考えて，頭から離れない”“腹の立つことがあると，それについて暴力的な内容の空想にふけることがある”など現実には起きていない報復や攻撃行動に関する思考や空想を表す内容であった。それゆえ，報復思考因子は怒りの対象となる相手への報復に関する反実仮想思考を反映した概念であるといえる。また，“口論をした後は，頭の中で相手と言い争いを続ける”という項目は，相手に対する一方的な攻撃行動を表したものではないため，負荷が小さかったと思われる。怒り体験想起因子は，Sukhodolsky et al. (2001) の研究における怒り記憶因子のうち“不公平な扱いを受けると，いつまでもあれこれ考え続ける”を除いた4項目に“腹立たしい経験をすると，あとからそのことを繰り返し思い起こす”“眠りにつく前には，腹立たしい記憶がよみがえってくる”の2項目が加わった6項目からなり，過去の怒り体験に関する想起しやすさを反映した概念である。除外となった項目について，不公平な扱いを受けることは直ちに怒りを喚起させるわけではなく，それについての詳細な分析をもたらしたり，その結果によっては相手への報復を想像させたりするため，他の因子に対しても負荷していたと思われる。

日本語版怒り反すう尺度の収束的妥当性について，日本語版怒り反すう尺度と怒り表出尺度日本語版との相関分析の結果は，怒り反すう傾向が高いほど怒りを抑制しようとする傾向も高く，一方で怒りの鎮静化は困難な傾向にあり，怒りを表出しやすい傾向にあることを示している。この結果は，本研究における予測を支持するものであり，Sukhodolsky et al. (2001) の研究と同様の結果である。また，本研究の結果は怒りの抑制と怒りの表出が有意な相関関係にないことを示しており，Spielberger et al. (1985) が示したように，怒りの抑制と怒りの表出は独立した概念であることを示唆している。日本語版怒り反すう尺度とネガティブな反すう尺度との相関分析の結果は，怒りを反すうしやすい人ほどネガティブな対象について反すうしやすいことを示しており，本研究における予測を支持するものである。日本語版怒り反すう尺度における各因子とネガティブな反すう尺度との相関分析の結果は，怒り体験への注意や反実仮想思考，過去の体験の想起がネガティブな体験に関する反すうにおいて共通する要素であることを示唆している。

怒り体験はさまざまな身体的・精神疾患との関連が指摘されており（渡辺，2008），怒りの持続や昂進をもたらす怒り反すうはそのリスク因子となりうる。怒り反すう尺度によって怒り反すう傾向を測定することは疾患のリスクが高い人を同定し，その予防を促すことができる点で有意義である。もし，怒り反すうを抑止することでリスクを減らすことができるなら，その方法を確立する必要がある。抑止方法の効果を検討するためには，怒りを反すうしやすい対象者が必要であり，怒り反すう傾向の測定はそうした対象者の選定にも役立つ。今後の課題は怒り反すう傾向と疾患との関連やそれを抑止するための方法を検討することである。最後に，本研究のデータは大学生を対象としているが，年齢によって怒り体験の対象や内容は異なるため，さまざまな年代について日本語版怒り反すう尺度の利用可能性を検証する必要があるだろう。

引用文献

安藤明人・曽我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦　治・坂井明子 1999 日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性，信頼性の検討　心理学研究，**70**, 384–392.

Averill, J. R. 1983 Studies on anger and aggression: Implications for theories of emotion. *American Psychologist*, **38**, 1145–1160.

Barber, L., Maltby, J., & Macaskill, A. 2005 Angry memories and thoughts of revenge: The relationship between forgiveness and anger rumination. *Personality and Individual Differences*, **39**, 253–262.

Bushman, B. J. 2002 Does venting anger feed or extinguish the flame? Catharsis, rumination, distraction, anger, and aggressive responding. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **28**, 724–731.

Gohm, C. L., Isbell, L. M., & Wyer, Jr. R. S. 1996 Some

thoughts about thinking. In R. S. Wyer, Jr. (Ed.), *Ruminative thoughts: Advances in social cognition*. Volume IX. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum. pp. 81–95.

日比野　桂 2008 怒りの鎮静化―怒りはどのように和らぐのか―　湯川進太郎（編）怒りの心理学―怒りとうまくつきあうための理論と方法―　有斐閣 pp. 59–74.

伊藤　拓・上里一郎 2001 ネガティブな反すう尺度の作成およびうつ状態との関連性の検討　カウンセリング研究，**34**, 31–42.

木野和代 2000 日本人の怒りの表出方法とその対人的影響　心理学研究，**70**, 494–502.

Klinger, E. 1996 Theories of thought flow: Points of kinship and fertile contrast. In R. S. Wyer, Jr. (Ed.), Ruminative thoughts: *Advances in social cognition*. Volume. IX. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum. pp. 107–120.

Martin, L. L. & Tesser, A. 1996 Some ruminative thoughts. In R. S. Wyer, Jr. *Ruminative thoughts: Advances in social cognition*. Volume IX. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum. pp. 1–48.

大渕憲一 1993 人を傷つける心：攻撃性の社会心理学　サイエンス社.

大渕憲一・小倉左知男 1984 怒りの経験 (1)：Averill の質問紙による成人と大学生の調査概況　犯罪心理学研究，**22**, 15–35.

Peled, M. & Moretti, M. M. 2010 Ruminating on rumination: Are rumination on anger and sadness differentially related to aggression and depressed mood? *Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment*, **32**, 108–117.

Rusting, C. L. & Nolen-Hoeksema, S. 1998 Regulating responses to anger: Effects of rumination and distraction on angry mood. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 790–803.

Spielberger, C. D., Johnson, E. H., Russell, S, F., Crane, R, J., Jacobs, G. A., & Worden, T. J. 1985 The experience and expression of anger: Construction and validation of an anger expression scale. In M. A. Chesney, & R. H. Rosenman (Eds.), *Anger and hostility in cardiovascular and behavioral disorders*. New York: Hemisphere. pp. 5–30.

Sukhodolsky, D. G., Golub, A., & Cromwell, E. N. 2001 Development and validation of the anger rumination scale. *Personality and Individual Differences*, **31**, 689–700.

鈴木　平・春木　豊 1994 怒りと循環器系疾患の関連性の検討　健康心理学研究，**7**, 1–13.

渡辺俊太郎 2008 怒りの健康への影響―怒りは健康を害するのか―　湯川進太郎（編）怒りの心理学―怒りとうまくつきあうための理論と方法―　有斐閣 pp. 75–94.

渡辺俊太郎・小玉正博 2001 怒り感情の喚起・持続傾向の測定―新しい怒り尺度の作成と信頼性・妥当性の検討―　健康心理学研究，**14**, 32–39.

（受稿：2012.3.30；受理：2012.11.20）